NHK音楽祭　ドイツレクイエムを鑑賞して

NHK音楽祭でブラームスのドイツレクイエムが演奏されると知り、是非ともナマの演奏を聴きたいと思いました。幸いにもインターネットでチケットを入手できたので他の所用と併せて上京した次第です。皆様にドイツレクイエムの素晴らしさを理解する一助になればと思い、演奏会の様子と感想の一端をお知らせします。

11月13日（月）　NHKホール。客席は3600、テレビで見慣れた会場ですがその巨大さを感じました。真ん中あたりの座席からでも舞台は遠く指揮者の表情までは見えないのです。

コンサートプログラムを見ると以下の言葉がありました。

ＮＨＫ音楽祭２０１７　　テーマ“人は歌い、奏でつづける”

クラシック音楽の歴史のはじまりは声楽（うた）だったとも言われていますから含蓄あるよいテーマだと思いました。

それで今年のプログラムに合唱曲ドイツレクイエムが選ばれた訳が分かります。

ブラームスのドイツレクイエムは今年の音楽祭シリーズの掉尾(ちょうび)を飾る演奏会でした。

指揮者　ヘルベルト・ブロムシュテット　１９２７年アメリカ生まれのスウェーデン人指揮者、１９５４年から指揮者として世界中で広く活動。１９７３年初来日、以後たびたび来日しＮ響を指揮、現在Ｎ響桂冠名誉指揮者。９０歳。敬虔なクリスチャンで宗教上の理由で菜食主義者として知られる。練習には厳しいとのこと。

ライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団　１７４３年世界初の市民階級による自主経営オーケストラとして発足。ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームスなど多くの作曲家の作品初演をしてきた歴史ある名門オーケストラ。

ウィーン楽友協会合唱団　１８５８年創立、創立当初はブラームスとヨハン・ヘルベックが主導した。

これまで著名なオーケストラと共演。歴史ある名門合唱団である。１９４７～１９８９年の間ヘルベルト・フォン・カラヤンのもとで合唱団として地位を確立。

これほどの著名指揮者・交響楽団・合唱団がそろったコンサートを聴くことはまたとない機会だと思いました。

18:50になっても続々客の入場が続く。19:00直前にようやく客席はほぼ埋まって会場は静まり空気が変わる。

19:05　合唱団入場、オーケストラ着席、90歳を超えて矍鑠（かくしゃく）たる指揮者ブロムシュテットが登壇。

19:10指揮者の手が動き始めた。表情まではよく見えないが、至って穏やかにはじまった。

第1曲の合唱がはじまる。しみじみと歌がひろがる。第2曲第3曲へと進む。そして第4曲はわれわれの練習中の耳慣れた曲。そして第5曲、第6曲へといつの間にか進んだ。最終曲まであっという間だった。

合唱が高音部でも全然問題なく歌われている。あたりまえだが。強弱のアクセントがはっきりと歌われている。

約90名の合唱団だがピアノ・ピアニッシモ部分も真ん中席でもはっきり聞こえる。フォルテも大声でない。最後まで明確だった。合唱団は女声50男声40である。各パートがよく聴こえる。オーケストラにかき消されることはない。第2曲のあと、指揮者の指示で合唱団は座席に座ったが、第3曲ですぐまた立ち上がった。あとはどうだったか覚えて

いない。ソプラノとバリトンソリストは暗譜、合唱団は楽譜持参。指揮者の卓上には聖書と思しき書籍一冊閉じられたまま置かれているのが映像で見えた。

ウイーン楽友協会合唱団

20:20　全曲が終わる。指揮者の手が徐々に徐々にゆるんで余韻を残しながら長時間の張り詰めた空気が溶け始めた。指揮者の手が最終的に降りたところで初めて観客から万雷の拍手が起こった。（聴衆の一人だけ余韻を楽しむゆとりのない者が拍手をしたがすぐ止んだ。）何回も何回も鳴り止まないコールに応えて指揮者と2名のソリストと合唱指導者が舞台袖から歩み出て応えていた。特にマエストロブロムシュテットは人気があって聴衆のファンが去らず、20:40ごろまで丁寧に応えていた姿が実に印象的でした。

今回の75分間、我を忘れて引き込まれるように聴いたのは初めてでした。スーパー指揮者と名門オーケストラ・合唱団のつくりだすドイツレクイエムは圧倒的に迫力があり、まことに聴く人の心を奪う極上の芸術でした。場内の緊張感と相俟って素晴らしい感動を覚えました。いわく言い難い至福のときでした。ブラームス音楽の素晴らしさを余すところなく表現した名演奏でした。しっとりと落ち着いた合唱。これぞブラームスが音楽で表現する人生観そのものだと思いました。横島先生からの「合唱団なら合唱曲を歌いなさい」との推薦で学び始めたブラームスの音楽、ドイツレクイエムのこれからの練習がいよいよ楽しみになりました。

ﾗｲﾌﾟﾁﾋ・ｹﾞｳﾞｧﾝﾄﾊｳｽ管弦楽団

（附記）　11/19夜の「クラシック音楽館」後半でドイツレクイエム」の第5曲以下の放送あり。指揮者ブロムシュテットの深い意味を込めたお話がありましたので放送をそのまま掲載します。

90歳を超えてもなお若々しいブロムシュテット、彼の生き方は常に"祈り"とともにある。ブラームス自身がドイツ語の聖書から言葉を選びつくりあげた「ドイツ・レクイエム」、礼拝のための音楽だったレクイエムを宗教を超え万人の心に届く音楽にしたいという願いがあった。

（以下ブロムシュテット談）

"祈るということは神と共に生きるということ。神の前ですべての行いに責任を持てる生き方をすることなのです。幸せな時も喜びのときも神と共にあると人生がとても美しくなります。伝統的なラテン語のレクイエムは死者の霊を鎮めるものです。死後の世界への警告の要素が強い。地獄かあるいは天国かと。しかしこの作品（ドイツレクイエム）は違います。死者のためでなく生者のために書いている。責任ある生き方をしていれば死を前にしても慰めがある、未来への希望やゆるしがある。最も感動的なのはソプラノが歌う第５曲です。合唱とソプラノが別の詞を歌うところ。合唱は「私はあなた方を慰めよう。母がその子を慰めるように」と歌います。一方ソプラノは「私はあなた方に再び会うだろう」と復活の希望を歌います。キリストはよみがえりその教えに従って生きれば永遠の命を与えられる、と。本当に感動的です。涙をこらえきれません。"

2017年11月20日　島倉敏夫